



気になるあいつ
わかぎゑふ

双葉社

気になる噺家

噺家の桂吉朝さんが亡くなった。まだ50歳の若さだった。どこから説明したらいいのだろうか：彼は私にとって日本一の話芸家、そして最良のアドバイザーであり、最高の親友でもあり、兄でもあり、手のかかるおっさんでもあり：ともかく人生の一部のような人だった。

だからこそ、死んだ今もその気にはなれない。あまりにも存在が大きい人が死ぬと、顔が見られないだけでいなくなった感じはしないものだ。こんな感覚は17歳の時に父親が死んだ時以来だ。それほど彼の存在は私の中で大きかったのだろう。

吉朝さんを初めて知ったのは、今から20年以上前のことだ。当時、東京に住んでいた私は、落語が好きでよく落語会に行っていた。大阪弁に飢えていたのもあって、関西の噺家さんが上京したら必ず聞きに行ったものだ。

ある日、銀座の芸術劇場で「米朝独演会」があり、これは必見！と張り切って行った。

吉朝さんは米朝師匠のお弟子さんだったので、その会に出演していたのだった。

忘れもしない、その時聞いたのは「ふぐ鍋」。私は「この人天才や！」と思った。容姿からして40歳くらいか？ と思ったのだが、単に老けているだけでその時彼は29歳だった。私はひと聞き惚れしてしまい、どういうわけかファンクラブを作ろうと決心した。

落語会のことなど何も知らなかったのだが、芝居の公演を何度も打っ

たことがあるので小さな劇場を借りて吉朝独演会を企画しようと思つていた。若かったが、無謀なことだとはちつとも思つていなかった。そのくらい吉朝の落語にはインパクトがあり、華があり、なによりも時代を超越する力を感じさせてくれたのだ。

その後、私自身が諸事情で大阪に戻ることになり、吉朝の追っかけ生活が始まった。情報誌で吉朝の字を見つけては、あらゆる落語会に行つたものだ。悲しいかな、当時の吉朝さんは、古典ファンの間では上手さに定評があつたが売れてなかつた。だから追っかけ生活も二ヶ月程度であつという間に全ての落語会に行きつくし、すぐに仲良くなつた。

そして知り合つて1年も経つ頃には、彼の方がうちの劇団に入つてきて、小劇場の役者としても舞台に立つようになった。ま、私が誘つたのだが：なんだか急展開な知り合い方だつた。

吉朝の思い出を書けばキリがない。ある時は落語で心底感動させてく

れたり、ある時はいたずら電話をかけてきて子供のように怒ったり、ある時は酔っ払ってうちの家の階段で吐いて泣いてるのを介抱したり、またある時は芝居のことで口論をしたりした。

舞台人としての最高の兄貴で、親友だった。だから死んでしまうなんて考えたこともなかった。一生そんな仲だと信じて疑ったこともなかったし、病气だと聞かされた時も治ると思っていた。

残念で悔しい死だった。自分の人生の何分の一かが、確実に失われた気がする。だが、もうどうしようもないのだろう。

ひとつ後悔していることがある。私は吉朝さんは天才だと思っていたから、将来必ず名人と呼ばれ、落語の大家になると思っていた。

だからこそ若い時に思い切り寄り道しておいた方がいいと思い、彼が落語以外のことをしたがるのを止めたことがなかった。そんなことをどこかに書いたこともあるし、吉朝さんに言ったこともある。本人も芝居、狂言、歌舞伎、錦影絵、邦楽、日舞となんにでも手を出したがる性格で、

そのひとつずつを落語に生かせる人でもあった。

でもこんなになく早く死んでしまうのなら、それが分かっていたら、もつともつと落語をやらせてあげればよかった。それが心残りだ。

【著者略歴】

わかぎさるふ

1959年、大阪府生まれ。女優、エッセイスト。1986年より故中島らも氏とともに劇団「リリパット・アーミー」を主宰し、現在同劇団の進化形「リリパット・アーミーⅡ」の座長。1994年より演劇ユニット「ラックシステム」を旗揚げ。演劇制作会社「玉造小劇店」を運営し、女優のみならず、脚本、演出、メイクから衣装まで芝居全般にわたりその才能を発揮し続けるスーパーレディ。主な著書に『すみっこのすみっこ』『女体の神秘』『秘密の花園』『ぬくい女』『イブの抜け穴』『大阪弁の詰め合わせ』など多数。
